外来語の連濁について

About RENDAKU on Foreign Loanwords in Japanese

呂　　建　輝
LU Jianhui

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第56号　2023年12月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.56 2023

外来語の連濁について

呂　　建　輝*

1．連濁と語種

連濁とは、「おや＋**と**り→おや**ど**り」のように、清音の語頭をもつ語（とり）が複合語等[1]の後部要素として用いられる際に濁音（どり）に変わる現象のことである。近年では、音声・音韻、語構成、歴史的要因など、さまざまな面での考察が行われているが、いずれの研究においても、ある暗黙の条件の下で進められている。それは、「連濁は基本的に和語に起こるもので、漢語、外来語には起こらない」という語種上の制約である。以下用例（1）では、後部要素「くるま」は和語であるため連濁が起こる。対して、用例（2）では後部要素「しゃ」は漢語、用例（3）では後部要素「カー」は外来語であるため、連濁が起こらないと考えられる。

（1）手押し車　　：ておし　＋　**く**るま　→　ておし**ぐ**るま
（2）除雪車　　：じょせつ　＋　**しゃ**　→　じょせつ**しゃ**
（3）ケーブルカー：ケーブル　＋　**カ**ー　→　ケーブル**カ**ー

連濁と語種についての論述は、「ライマンの法則[2]」で知られるBenjamin Smith Lymanの論文[3]には見られ、複合語において後部要素が漢語である場合は連濁が起こりにくいとの指摘があった。一方、「精進（しょう**じ**ん）」「文庫本（ぶんこ**ぼ**ん）」のように、連濁が起こる漢語も確かに存在する。前者「精進」の連濁は、古く鼻音前接のある、いわゆる連声濁の類であり（奥村 1952[4]、沼本 1982[5] など）、後者「文庫本」の連濁は、漢語の和語化の一種とみることができ形態音韻論的な連濁の類（江口 1993[6]、呂 2021[7] など）であると考えられ、漢語連濁の実態が明らかになりつつある

---

*　岡山大学学術研究院社会文化科学学域特任助教

1　「形態素＋形態素」からなる複合語のほか、漢語の連濁では「字音＋字音」の連濁や、歴史的連濁から化石的に濁音形で使用されている接辞などがある。本稿では、外来語を考察対象としているため、連濁のことを複合語後部要素頭音の濁音化に限る。

2　後部要素語中に既に濁音がある場合、連濁が起こらないという法則。Benjamin Smith Lymanにより発見。現代語のみならず、古代語においても有効との報告がある（鈴木 2005）。

3　屋名池（1991）による。

4　連声濁と字音の声調との関係を論じた研究である。

5　連声濁と字音の読み（呉音か漢音か）との関係を論じた研究である。

6　漢語も和語と同じく、語構成上の要因が連濁に影響していることを論じた研究である。

7　漢語の連濁形が濁音形式の後部要素として語彙化していく現象を論じた研究である。

といえる。

外来語に至っては、漢語よりもさらに例外が少なく、連濁がほとんど起こっていないといってよい。わずかに連濁が起こった例外として、中川（1966）は（4）「カルタ」、(5)「キセル」、(6)「ケット」を、Ohno（2001）はさらに（7）「カッパ」を取り上げた[8]。

(4) うた（歌）　＋　カルタ　→　うたガルタ（歌ガルタ）
(5) くわえ（咥え）　＋　キセル　→　くわえギセル（咥えギセル）
(6) あか（赤）　＋　ケット　→　あかゲット（赤ゲット）
(7) あま（雨）　＋　カッパ　→　あまガッパ（雨ガッパ）

2. 外来語の連濁に関する先行研究

外来語は基本的に連濁が起こらないとされているにもかかわらず、なぜ「カルタ」「キセル」「ケット」「カッパ」は連濁しているのだろうか。先行研究からは、以下（8）（9）（10）（11）のような見解があった（下線は筆者による）。

(8) 漢語であっても和語化した「カブシキガイシャ（株式会社）」や**比較的に早い時期に**ポルトガル語から借用された外来語の「アカゲット（赤ゲット）」「イロハガルタ（いろはガルタ）」などは連濁を受ける。明治以降、漢語以外の外来語が日本語の語彙の中に多量に流入してくるが、文字による影響などの理由で連濁しているものはほとんどない。

伊東（2008）より

伊東（2008）によれば、連濁する外来語は、比較的に早い時期に借用された外来語に限られる。本研究で確認できた初出例から見れば、(4)「カルタ」は室町末の「長宗我部氏掟書」（用例（12））、(5)「キセル」は江戸初期の『梅津政景日記』（用例（19））、(7)「カッパ」は江戸初期の『当代記』（用例(33)）と、400年前に日本に伝来した外来語が多いといえる。しかし（6）「ケット」に関しては、初出が明治期以降の『日新真事誌』である（用例(69)）。伊東（2008）自らも指摘するように、明治期にはすでに大量の外来語が日本に伝来していたはずで、「連濁は早い時期に借用された外来語に限られる」という説明だけでは難しい。また、400年前から日本の文献に確認できた外来語といえば、「カステラ」「キリシタン」といった例もあるが、現代では「いちご**カ**ステラ」「隠れ**キ**リシタン」のように連濁が起こらない。外来語の連濁には、その外来語が日本に入来した時期が確か

[8] その他、中川（1966）は「山ギャンプ」「印度ガレイ」も取り上げたが、Otsu（1980）、ティモシー・ほか（2017）が疑問視しそれらを否定した。

に関わっているとは考えられるが、入来時期のみが連濁を決定する要素であるとまではいえないようである。

(9) 古くは「煙管キセル　合羽カッパ」も外来語である。しかし、**長い間に日本人の生活に定着**して**漢字で書かれる**ようになった。また、「南蛮煙管ギセル　雨合羽アマガッパ」のように連濁も起こす日本語となった。
カステラは日本に入ってきたのは古いが、日本人の生活に定着することが難しかった。そういう言葉は、キセルやカッパのように日本語と認識されるには至らない。

岩岡（2002）

岩岡（2002）では、長い間にわたり日本人の生活に定着するというプロセスが外来語の連濁を影響する要因であると主張し、その指標の一つとして「漢字で書かれる」ことが挙げられた。このように考えると、(4)「カルタ」は「骨牌」「歌留多」、(5)「キセル」は「煙管」、(6)「ケット」は「毛布」、(7)「カッパ」は「合羽」のように、連濁する外来語はいずれも漢字表記があるということがわかる。しかし、連濁しない「カステラ」「キリシタン」も歴史上「加須底羅」「切支丹」といった漢字表記が見られたが、少なくとも本研究の調査では濁音例は見つからなかった。また、「長い間」という時期上の設定をすると、伊東（2008）と同じく、明治期以降に出現した（6)「ケット」の連濁が説明できない。

(10)漢語・外来語で連濁を起こす語は、**和語化している**と思われるほど**なじみのある語**に多い。

佐藤大和（1990）より

佐藤（1990）は、連濁する外来語はなじみのある語が多いと指摘している。確かに（4)「カルタ」は遊戯用の道具、(5)「キセル」は嗜好品、(6)「ケット」(7)「カッパ」は衣料品と、いずれも庶民の生活に親しみのある類のものであるといえる。石綿（2001）によれば、南蛮貿易などに使用された通商一般用語は多くの庶民に知られており、社会的普及度が高かった。こういった語彙は口にしたり耳にしたりして、音声としてやり取りしているうちに訛っていき、ついには和語のように連濁が起こってしまったということも考えられる[9]。この点について、中川（1966）にも同様な指摘が見られる。

[9] 高山（2012）によれば、かつての外来語であった漢語の類も、より庶民･口頭語に近い呉音系漢語においては、日本語的な訛りとして濁音化現象が起こる。

(11)近世入来の外来語の和語化は、もとより、明治以降の外来語に比して、年代の古さを物語っている。明治以降の外来語は、多くが、耳よりも目を経て、音声語としてよりも、文字語として、いわば横文字ことばとして入ってきた。**江戸時代の外来語は、主として耳から入ってきた**。それだけに、そのことばを、国語流に「節用化」さえもして、**国語同化が進んだ**のに対して、明治以降は、横文字文献から、西欧語優位の観念を支えとして、しきりと引用導入した。むしろ外来語としてのスタイルを失わないことの方が、和語に対して、ハイカラさ、新鮮味、使用者の優位性が保ちうると考えられていた。その上、和語の語彙の乏しさ、対訳適語の欠如等は、外来語の流入を助けた。そのような情況下で、外来語が、連濁という和語化の指標ともいうべき洗礼を経ないままに、一つの地歩を占めてかたまりつつあるといえる。そのような意味の国語同化である。

中川（1966）より

中川（1966）の論が正しいとすれば、現代の状況はともかくとして、日本に伝来して間もない近世においてはすでに（4）「カルタ」（5）「キセル」（7）「カッパ」は多用され、そして連濁が起こっていたということになる。しかし、これまでの先行研究は理論上の記述にとどまり、近世における外来語連濁の実態は未だに明らかにされていない。また、明治期以降に出現した（6）「ケット」がなぜ連濁するかという問題も残っている。

以上を踏まえ、本稿では歴史上における外来語連濁の実態を調査し、一部の外来語にしか起こらなかった連濁の要因を考察する。

3. 調査方法

本研究では、近世の文献に出現し、かつ連濁が起こり得る外来語を主な考察対象とする。外来語かどうかの判断は『日本国語大辞典 第2版』を基準にした。なお、「連濁が起こり得る」とは、語頭が清音のもの（カ行音、サ行音、タ行音、ハ行音）で、かつライマンの法則を避けるため語中に濁音がないもの[10]を指す。

以上の方針を基に、JapanKnowledge版「日本国語大辞典」の後部一致検索機能を使い、語例の網羅作業を行った。次に、これらの外来語を後部要素とする複合語を、同JapanKnowledge版「日本国語大辞典」、および中納言版「日本語歴史コーパス」、「日本古典文学大系本文データベース」[11]、JapanKnowledge版「日本古典文学全集」、『時代別国語大辞典（室町時代編）』より該当用例を収集した。その後、集められた用例を底本に当て、語形や読みの確認作業を行った。該当清音に濁点

[10] 但し、半濁音を示すと思われる「゜」は濁音ではないため、ライマンの法則による除外対象としない。
[11] 但し、2023年8月31日現在は公開停止している。

が付されたものは濁音だったとし、濁点が付されなかったものは清濁不明とする[12]。

以上の方法で、「～カルタ」「～キセル」「～カッパ」「～サラサ」「～サントメ」「～テンプラ」に該当する外来語に濁音形が確認できた。以下4節で詳述する。

4. 連濁形が確認できた外来語

4. 1. カルタ

「カルタ」はポルトガル語carta（意：カード）に由来する[13]。本研究で確認できた最も早い用例は1596年の「長宗我部氏掟書」にあった。

(12)博奕、**カルタ**、諸勝負令停止

明大本「長宗我部氏掟書」文禄五年十一月十五日・三条 [1596]

その後、江戸時代前期より複合語の後部要素として濁音形「～ガルタ」が出現した。

(13)一銭二銭がけに**よみがるた**といふ事を、例年手すさみ

国立国会図書館蔵本『子孫鑑』中(2-14) [1673年]

(14)そのとなりには**かぞへがるた**ほう引

国立国会図書館蔵本『真実伊勢物語』二・四(46) [1690年]

(15)なさけなやすそびんばうのはりぞこなひ、打まくる**三枚（まい）がるた**

国立国会図書館蔵本『新色五巻書』一・五(1-19) [1698年序]

(16)かたはだぬいで四十八願の絵合、後には**三枚（まい）がるた**のおせ／＼

国立国会図書館蔵本『御前義経記』八・一(2-65) [1700年]

(17)あなたと**哥骨牌（うたがるた）**に致さうか

国文学研究資料館蔵本『浮世風呂』三・下(243) [1812年]

その他、濁点が付されなかった「～カルタ」は以下用例（18）「うたカルタ」の1例を確認した。

(18)続松（ついまつ）**うたかるた**の事也。

国立国会図書館蔵本『色道大鏡』七・翫器部(6-35) [1677年序]

---

[12] 古文献の性質上、濁音にもかかわらず濁点を付さないことがあるため、濁点がなくても実際は濁音で読まれていた可能性がある。

[13] 『日本国語大辞典 第2版』による。語源情報以下同様。

4. 2. キセル

「キセル」の語源はカンボジア語khsierである。新村（1926）によると、ポルトガル船によって伝来したタバコを吸う道具であるキセルが、その材料であるラオ竹とともにカンボジアから輸入されたため、カンボジア語khsierから名称を取ったという。

「キセル」が文献に確認できた最も早い用例は1612年の『梅津政景日記』にあり、「キセル」のほか、複合語の後部要素として用いられる「フキキセル」も出現した。

(19)院内にて**きせる**をかい、**ふききせる**の様にいたし

秋田県立図書館蔵本『梅津政景日記』慶長一七年四月廿六日 [1612年]

その後、江戸前期より濁音形「ギセル」が文献に出現した。

(20)**水口（みなくち）ぎせる**も名物也

国立国会図書館蔵本『東海道名所記』五(144) [1659-61年]

(21)鐘鋳のくはんじんにとらせさうなる**ひしげぎせる**に

国立国会図書館蔵本『都風俗鑑』一(1-20) [1681年序]

(22)**継煙管（つぎぎせる）**を無理取に合羽の切の莨入をしてやり

国立国会図書館蔵本『好色一代女』五・四(13 表) [1686年]

(23)賤しき身として誉るは推参也と、**焼煙管（やきぎせる）**したたかに頂き

国立国会図書館蔵本『けいせい色三味線』鄙・二(4-19) [1701年]

(24)**大仏ぎせる**・火なわ・油引の扇いりませんか

早稲田大学図書館蔵本『五ケの津餘情男』巻二・二(2-14) [1702年]

(25) 清十郎はしんはいのざうふをやぶりし**長ぎせる**頼むかたなく見へにける

早稲田大学図書館蔵本『五十年忌哥念仏』下(31) [1707年上演]

(26)壹はの火なはに火を付て、**あひ合ぎせる**思ひぐさ、思ひしかいもなつのせみ

国文学研究資料館蔵本『丹波与作待夜の小室節』夢路のこま(38) [1707年頃上演]

(27)母親が釜の前で**横ぎせる**くはへながら

国立国会図書館蔵本『諸道聴耳世間猿』二・一(1-28) [1766年序]

(28)**銀（ぎん）ぎせる**屋に下りに至ては着物のことき羽織を着し

早稲田大学図書館蔵本『大通俗一騎夜行』巻之一・人界に因る見越入道（15) [1780年序]

(29)おれも相応にナ水がみの**銀ぎせる**でな

国文学研究資料館蔵本『通志選』土手のゆきき附見立（16) [1781年頃写]

(30)うぬがあひかたのうわさをすることも知らねへで、**あげぎせる**で居る

国立国会図書館蔵本『夜半の茶漬』美濃近江寝物語（15）[1788年序]

(31)煙管も煙草のまずに**さらぎせる**でおけば

国文学研究資料館蔵本『続々鳩翁道話』壱之上(261）[1839年]

その他、濁点が付されなかった「～キセル」は以下用例(32)「ひごキセル」の1例を確認した。

(32)じゃうずのくすしもろはくとたんばたばこに**ひごきせる**

筑波大学附属図書館蔵本『しきおんろん』(50）[1643年]

4. 3. カッパ

「カッパ」はポルトガル語capaに由来し、確認できた初出例は1615年前後の『当代記』にあった。

(33)猩々皮の**かっは**

国立公文書館蔵本『当代記』四(4-93）[1615年頃]

その後、江戸中期頃より濁音形「～ガッパ」が出現した。

(34)芸古乗の木馬袖付の**紙合羽（かみがつは）**

早稲田大学図書館蔵本『懐硯』一・三(11 表）[1687年]

(35)油をひきたる、是を**雨油衣（あまがつは）**といふ

京都大学附属図書館蔵本『万金産業袋』(103）[1732年]

(36)雨衣 あまぎぬ〈和名〉江戸にて、**もめんがつぱ**と云

国立国語研究所蔵本『諸国方言物類称呼』巻四(4-30）[1775年]

(37)おらァ**半合羽（はんがつぱ）**のうへへ

国文学研究資料館蔵本『花暦八笑人』四追加上(246）[1834年]

(38)**なつ合羽（がつは）**のちゞみあかりたるをきてさんどがさをさげて

東京大学文学部国語研究室蔵本『明烏後正夢』(二編下-4）[1821-24年]

(39)いや。**とうゆがつば**としてもつはしはやります

国立国会図書館蔵本『鹿のまき筆』(44）[1863年]

その他、濁点が付されなかった「～カッパ」は以下用例(40)「風カッパ」、(41)「もめんカッパ」の2例を確認した。

(40)勘七が旅商の折に用ひし**風合羽（かざかつは）**、菅笠を尋ねだし

東京大学文学部国語研究室蔵本『縁結月下菊』下・六（下-27）[1839年序]

(41)おいらが合羽をかしてやろう　ト弥次らうが**もめんかつは**をとつ

早稲田大学図書館蔵本『東海道中膝栗毛』六編下編（22-七下-36）[1862年]

4. 4. サラサ

「サラサ」が最初に文献に出現したのは1633年の『犬子集』である。

(42)散音も色も**さらさ**の紅葉哉〈親直〉

早稲田大学図書館蔵本『犬子集』五・紅葉（2-27）[1633年序]

濁音形の「～ザラサ」は江戸中期より文献に出現する。

(43)京西陣羽織地　〈略〉・**京ざらさ**　・京かび丹

京都大学附属図書館蔵本『万金産業袋』（77）[1732年]

(44)はけめ残留の布子に**南きんざらさ**のあはせを下に着

国立国会図書館蔵本『世界の幕なし』（12）[1782年]

(45)可愛や**かきざらさ**の蒲団、表替した畳

早稲田大学図書館蔵本『徒然睟か川』二（11）[1783年]

(46)花色ちちぶのうら繻ばん**唐（とう）ざらさ**にくろさやの半えり

国立国会図書館蔵本『十界和尚話』四：畜生界（13）[1798年]

(47)あみどりをぬひたるそろへ、**だんざらさ**うつしの色絲いりの金らんのをび

早稲田大学図書館蔵本『箱まくら』中（4）[1828年]

(48)丁稚に負す袱も。貝も忽地**紅更紗（べにざらさ）**。

東京大学文学部国語研究室蔵本『浮世新形恋の花染』初編・下・3ウ[1833年]

(49)Nuizarasa ヌヒザラサ 繡花 Embroidery.

『和英語林集成（初版）』[1867年]

その他、濁点が付されなかった「～サラサ」は以下(50)「木綿サラサ」、(51)「唐サラサ」、(52)「南京サラサ」の3例を確認した。

(50)夕間暮小風呂に流す水の月〈信徳〉　**木綿さらさ**の紅葉かたしく〈芭蕉〉

早稲田大学図書館蔵本『桃青三百韻：附両吟二百韻』（6）[1678]

(51)中華より渡るを**唐華布（とうさらさ）**と云也。唐さらさは洗へども文采落ず

国立公文書館蔵本『本朝世事談綺』一・衣服門・暹羅染(1-9) [1734年]

(52)座鋪の腰張りはことごとく**南京晒紗（さらさ）**、畳をば猩々皮を以てこれを包み

早稲田大学図書館蔵本『笑註烈子』三(3-8) [1782年]

4. 5. サントメ

「サントメ」が最も早く文献に出現したのは1679年の『二葉集』である。

(53)ひっくりかへさう餌飯の浦波　**さんとめ**の袴もふるきこしの山〈笑吟〉

『二葉集』(『日本国語大辞典 第二版』より) [1679年]

濁音形の「～ザントメ」は江戸後期より出現する。以下に再掲する(44)「はけめ残留」は、「残」字が用いられていることから、当時濁音「ざんとめ」と読まれていたと考えられる。

(54)着物は合羽で見へねども袂りの所より**唐ざんとめ**の綿入と見へ

霞亭文庫本『道中粋語録』(6) [1772-81年頃]

再掲(44)**はけめ残留**の布子に南きんざらさのあはせを下に着

国立国会図書館蔵本『世界の幕なし』(12) [1782年]

(55)**黒桟留（クロザントメ）**の鼻緒をすげた。溜塗の下駄をはき

早稲田大学図書館蔵本『閑情末摘花』初・五回(1-47) [1839年]

その他、濁点が付されなかった「～サントメ」は以下用例(56)「くろサントメ」、(57)「京サントメ」の2例を確認した。

(56)出は、**くろさんとめ**のふりそで

早稲田大学図書館蔵本『客衆肝照子』振袖布子出(21) [1786年]

(57)そさうなる茶宇じま**京さんとめ**の御衣にめしかへ給ふ

国立国会図書館蔵本『鸚鵡返文武二道』(5) [1789年]

4. 6. テンプラ

「テンプラ」が最初に文献に確認できたのは1748年の『歌仙料理』であった。

(58)**てんふら**は何魚にても温飩の粉まぶして油にて揚る也

味の素食の文化センター蔵本『歌仙料理』十月(44) [1748年]

濁音形「～デンプラ」にあたる読みが確認できたのは以下(59) の江戸後期の一例のみで、その他濁点が付されなかった「～テンプラ」といった用例は確認できなかった。

(59)ちつと**悪毒天麩羅（あくどくでんふら）**か。黒漫魚のさしみで油の乗つた。

国立国語研究所蔵本『春色梅児与美』巻三・8オ [1832年]

以上では、近世において連濁形が確認できた外来語の実態を調査した。対照として、連濁形が確認できなかった外来語に対しても、同様な手法で調査を行った。以下5節ではそれらの実態を確認する。

5. 連濁形が確認できなかった外来語

5. 1　カネキン／カナキン

『時代別国語大辞典』によれば、「カネキン／カナキン」は1571年の文献には出現した。

(60)善香進上。昌叱ハ**金キン**打敷進上。梅花ト白鷺二色

『二条宴乗日記』元亀二年三月八日（『時代別国語大辞典』による）[1571]

一方、「カネキン／カナキン」を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 2. カルサン

『時代別国語大辞典』によれば、「カルサン」は『言経卿記』文禄二年の文章には出現した。

(61)又白アヤノ小袖三十、紅梅小袖十、**カルサン**三、ダウブク二、夜ノ物二ツ等被参云々

『言経卿記』文禄二年九月四日（『時代別国語大辞典』による）[1593年]

一方、「カルサン」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 3. キリシタン

『日本国語大辞典』によれば、「キリシタン」は中世末よりキリスト教関係の文献に出現する。

(62)如何に**きりしたん**、爰にをひて観念せよ

『ぎやどぺかどる』上・一・三（『日本国語大辞典 第2版』による）[1599]

「キリシタン」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査で以下用例(63)「転切支丹」の1例のみ確認した。漢字表記のため、その清濁は不明である。

(63)**転切支丹**類族出生之覚古**転切支丹**何右衛門曾孫何兵衛忰

国文学研究資料館鵜飼文庫蔵本『地方凡例録』八(356) [1794年写]

5. 4　カステラ

『日本国語大辞典』によれば、「カステラ」とみられる語は1625年の『太閤記』に出現した。

(64)下戸には、**かすていら**、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、こんぺい糖などをもてなし

『太閤記』或問（『日本国語大辞典 第2版』による）[1625]

「カステラ」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査で以下用例(65)の1例を確認した。「花**か**すていら」と、濁点が付されなかったため、清濁不明である。

(65)「カステイラブロート」**花かすていら**

国立国会図書館蔵本『紅毛雑話』5巻-1（13）[1787年序]

5. 5. カルメラ

『日本国語大辞典』によれば、前記「カステラ」と同じく、「カルメラ」とみられる語も1625年の『太閤記』に出現した。

再掲(64)下戸には、かすていら、ぼうる、**かるめひる**、あるへい糖、こんぺい糖などをもてなし

『太閤記』或問（『日本国語大辞典 第2版』による）[1625]

一方、「カルメラ」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 6. コンペイトー

『日本国語大辞典』によれば、前記「カステラ」「カルメラ」と同じく、「コンペイトー」とみられる語も1625年の『太閤記』に出現した。

再掲(64)下戸には、かすていら、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、**こんぺい糖**などをもてなし

『太閤記』或問（『日本国語大辞典 第2版』による）[1625]

一方、「コンペイトー」と見られる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 7. チャルメラ

『日本国語大辞典』によれば、「チャルメラ」とみられる語は1671年の『呂宋覚書』に出現した。

(66)其外色々はやし物あり、尤**チャルメイラ**あり

『呂宋覚書』(『日本国語大辞典 第2版』による) [1671]

一方、「チャルメラ」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 8. フラスコ

『日本国語大辞典』によれば、「フラスコ」は1676年の俳諧集『天満千句』に出現した。

(67)風に柳の青き**ふらすこ**〈宗恭〉　唐土より降て来りし春の雨〈西花〉

『天満千句』(『日本国語大辞典 第2版』による) [1676]

一方、「フラスコ」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

5. 9. カピタン

「カピタン」とみられる語は、本調査で確認できた最も早い出現は1684の『諸艶大鑑』である。

(68)上に**かひたん**の玉子色なるをひつかへしに

京都大学附属図書館蔵本『諸艶大鑑』一・花の色替て江戸紫(21 ウ) [1684年]

一方、「カピタン」とみられる語を後部要素とする複合語は、本調査では見つからなかった。

6. 考察

4節、5節で確認した用例について、近世の諸文献に出現した際どのような漢字表記が用いられていたか、音形（読みの表記）はどのようにされていたか、近世の辞書『書言字考節用集』に出現したかどうかの調査も行った。その結果を以下〈表1〉〈表2〉にまとめる。

〈表1〉濁音形が確認できた外来語の特徴

後部要素	漢字表記	音形	書言	初出	濁音形初出	複合語における前部要素
カルタ	骨牌　哥骨牌 加留多　賀留多	カルタ	○	1596	1673	よみ～　数え～　三枚～　歌～
キセル	煙管　背炉 希施婁　喜世留	キセル	○	1612	1659-61	ひご～　水口～　ひしげ～ 継～　焼～　大仏～　長～ あひ合～　横～　銀～　あげ～ さら～
カッパ	合羽　油衣	カツハ カツバ	○	1615頃	1687	風～　木綿～　紙～　雨～ 坊主～　夏～　桐油～
サラサ	更紗　華布　花布 晒紗　皿砂　印華	サラサ	○[14]	1633	1732	唐～　木綿～　南京～　書き～ 段～　ぬい～　京～　紅～
サントメ	桟留　算留 桟留嶋　聖多點	サントメ	×	1679	1772-81頃	黒～　京～　唐～　はけめ～
テンプラ	天麩羅	テンフラ	×	1748	1832	悪毒～

〈表2〉濁音形が確認できなかった外来語の特徴

後部要素	漢字表記	音形	書言	初出	濁音形初出	複合語における前部要素
カナキン	金巾　西洋巾 西洋布	カナキン　カネキン カネキヌ	○	1571	-	南京～
カルサン	軽衫	カルサン	○	1593	-	
キリシタン	切支丹　切死丹 吉利支丹 貴理志端 鬼利支端	キリシタン	×	1599	-	転～
カステラ	加須底羅	カステラ　カステイラ	×	1625	-	花～
カルメラ	浮石糖 加留女以良	カルメイル　カルメイラ	○	1625	-	
コンペイトー	金餅糖　金平糖 渾平糖	コンヘイタウ コンヘイトウ	×	1625	-	
チャルメラ	嗩吶　太平簫 喇叭	チヤルメラ　チヤルメイラ チヤルメル　チヤルメロ チヤロメロ　チヤラメラ チヤンメラ　チヤンメル	○	1671	-	
フラスコ	仏狼瓷　仏狼壺 硝子	フラスコ　フラソコ	○	1676	-	
カピタン	鹿比丹　加毘旦 加必旦	カビタン	○	1684	-	京～

[14] 「印華布（サラサゾメ）」の形で出現している。

6. 1. 漢字表記について

〈表1〉〈表2〉からわかるように、濁音形が確認できた外来語も確認できなかった外来語も、みな漢字表記をもっていた。岩岡（2002）の指摘する「漢字で書かれるかどうか」は、少なくとも近世当時においては連濁を影響する要因ではなかったと考えられる。

6. 2. 音形について

〈表1〉からわかるように、濁音形が確認できた外来語は、近世においてほぼ決まった音形が用いられていた。これに対して、〈表2〉からわかるように、濁音形が確認できなかった外来語は、音形にゆれが見られるものが多かった。石綿（2001）は、もともと日本語とポルトガル語の間で音形上の相違が少なかったことを指摘しているが、音形にゆれが少ない語にのみ濁音形が発生するという事象から、ゆれの少ない語ほど「国語化」が進み、和語のように連濁可能な語彙となったといえるのではないか。尤も、ゆれの少ないことも連濁が起こることもあくまで「国語化」が進んだ結果であって、「国語化」の進む要因については、以下でさらに追究する必要がある。

6. 3. 『書言字考節用集』に出現したかどうかについて

辞書はその時代に使用されていた語彙を反映するもので、『書言字考節用集』に出現したかどうかは、少なくとも当該語の江戸中期の日本社会における使用状況を反映しているといえる。〈表1〉では、江戸前期までに文献に初出した「カルタ」「キセル」「カッパ」「サラサ」は『書言字考節用集』に出現しており、江戸中期頃より文献に初出する「サントメ」「テンプラ」は出現しなかった。これはまさに、江戸中期当時における当該語の慣用度を反映しているといえる。

一方、〈表2〉においても、「キリシタン」「カステラ」「コンペイトー」を除き、『書言字考節用集』に出現していることがわかる。慣用度の高さと連濁との間で、必ずしも直接的な関係があるようには考えられない。

6. 4. 初出から濁音形初出までの年数について

伊東（2008）、岩岡（2002）では、外来語が連濁する要因の一つとして、長い間にわたる使用が挙げられた。しかし〈表1〉から、語の（単独での）初出から濁音形の初出までの時間をみると、「カルタ」は1673 − 1596 = 77年、「キセル」は1660[15] − 1612 = 48年、「カッパ」は1687 − 1615 = 72年、「サラサ」は1732 − 1633 = 99年、「サントメ」は1776 − 1679 = 97年、「テンプラ」は1832 − 1748 = 84年と、いずれも100年未満であったという結果になる。これは、例えば明治・大正期に入来した外来語なら2023年現在では連濁が起こってもおかしくないことを意味する。しかし実際、近世におけ

[15] 仮に1659年〜1661年の中間値（小数点以下切り捨て）で計算する場合。以下同様。

る外来語は連濁し、近代以降の外来語は連濁しなかった。ということは、近世においては、現代とは全く異なる外来語の連濁条件が適用されていたという可能性が浮上してくる。

6. 5. 複合語における前部要素について

「複合語における前部要素」においては、〈表1〉と〈表2〉では全く異なる傾向を示している。〈表1〉では、濁音形が確認できた語のほとんどが、複数の前部要素に付き複合語を作っていたことがわかる。これに対して、〈表2〉では、濁音形が確認できなかった語は、複合語を作ったことがない、もしくは限られた前部要素をもつ複合語しか作ったことがなかった。無論、本研究において十分な用例採取ができなかった可能性も否めないが、同手法で用例を採取してまとめた〈表1〉と〈表2〉の間でこれほどはっきりした違いがみられたのは、やはり複合語を作ることができるかどうかが、近世において連濁を大きく影響する要因の一つではないかと考えられる。

本稿1節の冒頭で「連濁」の定義を確認した。連濁は、言うまでもなく、複合語の後部要素として用いられる際にのみ起こり得る濁音化現象であり、複合語の後部要素として使用したこともなかった「カルサン」「カルメラ」「コンペイトー」「チャルメラ」「フラスコ」は連濁が起こるはずもない。1語のみだったが複合語の後部要素として使用されることがあった「南京-カナキン」「転-キリシタン」「花-カステラ」「京-カピタン」については、本研究において濁音形が確認できなかったものの、実際濁音で使用されていたけれど濁点が付されなかっただけだったという可能性もある。こういった少数の複合語の中でも、たまたま濁点が付されて出現したのが〈表1〉にある「悪毒デンプラ」であった。

とはいえ、こういった複合語1語のみをもつ外来語は、一時的に造語されたものである可能性も十分にあり、近世社会において普遍的に複合語を作ることのできる要素ではなかった可能性も十分に考えられる。その結果、近世では連濁が可能だった「～テンプラ」も、現代では「えびテンプラ」「いかテンプラ」のように連濁しない外来語となった。

6. 6. まとめ

6. 4で述べたように、近世では現代とは全く異なる外来語連濁の条件が適用されていた。そして6. 5で述べたように、近世においては、外来語であっても、後部要素として複合語を作る機会が多ければ、和語と同じように連濁が起こった。この現象は、ポルトガル語等に由来する語彙に限らず、中国語に由来する漢語にも適用する側面をもつ。その例として、中世～近世に入来し唐音で読まれる漢語が複合語の後部要素として使用される際は、かなり規則的に連濁を起こしている事象が挙げられ（洋服**箪笥**、羽毛**蒲団**、唐**繻子**など）、「産（さん）」「勢（せい）」「本（ほん）」を後部要素と

する漢語も、特に近世において濁音形が急増したという事象が見られる[16]。近世より以前における連濁の実態は今後さらに明らかにする必要がありそうである。

7.「ケット」の連濁について

「ケット」に関しては、『日本国語大辞典』によれば、初めて文献に出現したのは『日新真事誌』の明治期以降の記事であった。明治期以降に出現したにもかかわらず連濁が起こる唯一の外来語として、別項として本節で用例を確認し、考察を行う。

(69)**ケット**大商ひあり 金巾は売買なし

『日新真事誌』明治五年三月一九日（『日本国語大辞典 第2版』より）[1872年]

『日本国語大辞典（第2版）』によると、「ケット」は英語に由来する「ブランケット（blanket）」の略である。「ブランケット」とみられる用例は、1860年の『航米日録』から見られる。

(70)長ク且ツ粗ナルヲ以テ身ヲ纏テ臥ス、名ヲ**クランケツホ**と云フ

国文学研究資料館蔵本『航米日録』（54）[1860年]

1880年より、「ケット」は漢字「毛布」に当てられ使用されはじめる。

(71)二人の賊が出て一日汗をたらして稼いだ銭と**毛布（けっと）**を奪ひとられ

『読売新聞』明治13年11月4日朝刊 [1880年]

一方、漢字表記「毛布」は「ケット」に当てられるより以前、近世において既に使用されていた。1807年の『秋苑日渉』では、「毛布」の読みとして「ケヲリ」が付されていた。

(72)**毛布（ケヲリ）**［明道雑志］詩曰。無衣無褐。鄭玄注。褐。――也。――非今段子乎則其来自三代也。

味の素食の文化センター蔵本『秋苑日渉』（393）[1807年]

「毛布：ケヲリ ＞ ケット」という変化において、「ケ」の部分の読みは変わらなかった。この「ケ」は漢字「毛」の訓読みでもある。このような偶然から、「ケット」は和語扱いされ、連濁が起こっ

[16] 呂（2014）、呂（2015）、呂（2021）を参照。

たという可能性も確かに考えられる。

他方、「ケット」の濁音例を確認すると、意外にも「赤ゲット」の1例のみしかなかったことがわかった。明治期の新聞記事を調査したところ、「赤ゲット」は1888年に初めて出現した。「あかげっと」と、濁音の読みが付されており、1888年の初出当時は既に連濁していたことがわかる。

(73) **赤毛布（あかげっと）**一枚の訴訟

『読売新聞』明治21年12月8日朝刊 [1888年]

前述したように、「毛布」は外来語「ケット」の漢字表記として使用されるようになっても、語頭の「毛」は以前の訓読みと変わらなかったという誤認もあった。さらに、漢字表記「赤毛布」は二文字目まで読んでいくと「赤毛」は「アカゲ」と読むべきもので、当時の辞書にも掲載のある語であった。

(74) Akage, **アカゲ**, 赤髪 n. Red hair.

『和英語林集成（再版）』[1872]

(75) **あかげ**　根。｛赤毛｝　樺ニ似タ馬ノ毛色。

山田美妙『日本大辞書』[1893]

このように、見かけ上「毛」の訓読みを残したまま「毛布：ケヲリ ＞ ケット」という語種交替が発生した。さらに意味上も「色の赤い毛織製品」と、毛布（ケヲリ）本来の意味が強く残っていた。このような錯覚から、例外にも「赤ゲット」に連濁が起こったのではないかと考えられる。

8. まとめ

これまでの研究では、連濁は外来語には起こらないもので、わずかに連濁する外来語を例外扱いとされてきた。本稿ではあえてその僅かなる例外に注目し、なぜ連濁する外来語が存在するかを追究し、主に近世の文献を中心に調査・考察を行った。その結果、近世においては、現代とは異なる連濁システムが存在し、たとえ外来語であっても、後部要素として複合語を作る機会が多ければ、連濁が起こるということが明らかになった。

近年の研究では、格関係か修飾関係か、左枝分かれ構造か右枝分かれ構造かなど、語構成と複合語の連濁との関係をめぐる議論が多い。こういった語構成も、根源的には和語に由来するもので、

漢語・外来語といった基本的に語の並置[17] によって文を構成する外来語彙とは縁遠いものであった。後部要素として複合語を作ることで、「箱　→　木箱、紙箱、筆箱、ごみ箱…」のように、後部要素（箱）の表す意味が具体化され（何で作られた箱か、何を入れるための箱か）、多義的な和語にはどうしても必要な機能であるといえる。一方、外来語彙でも、もしこのような類別[18] 用法を獲得すれば（キセル　→　焼きギセル、長ギセル、横ギセル、銀ギセル…）、和語と同じように扱われることによって、連濁が起こったのではないだろうか。

尤も、外来語の連濁も明治期頃には終焉を迎えた。近世では耳から入る音声語だった外来語が近代以降には目から入る文字語になった、という中川（1966）の指摘もまさにその通りだが、明治期以降の造語風潮の中で、古く音韻上の問題であった連濁が、語彙上の問題である接尾形式へと化石化したとも考えられる。その結果、明治期までに濁音形をもち、かつ現代でも使用されつづけている「～ガルタ」「～ギセル」「～ガッパ」は濁音形のまま残存し、明治期までに濁音形が普及されなかった「～テンプラ」「～カステラ」は清音形で使用されているのであろう。

本稿では考察対象を外来語にとどめているが、近世より以前の連濁を明らかにするためには、さらに漢語等を対象とする考察も必要であると考え、これを今後の課題とする。

＜参考文献＞

石綿敏雄『外来語の総合的研究』（東京堂出版、2001）
伊東美津「連濁について」『九州国際大学教養研究』15-2（九州国際大学教養学会、2008）
岩岡登代子「連濁と日本語」『文学』3-4（岩波書店、2002）
江口泰生「漢語連濁の一視点：貞享版「補忘記」における」『国語国文』62-12（臨川書店、1993）
佐藤大和「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声 音韻』（明治書院、1990）
新村出「キセルの語源」『文藝春秋』10（文藝春秋、1926）
鈴木豊「ライマンの法則の例外について：連濁形「―バシゴ（梯子）」を後部成素とする複合語を中心に」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』4（文京学院大学総合研究所、2005）
高山倫明『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房、2012）
ティモシー・J・バンス、金子恵美子、渡邊靖史編『連濁の研究：国立国語研究所プロジェクト論文選集』（開拓社、2017）
中村芳雄「連濁・連清（仮称）の系譜」『国語国文』35-6（臨川書店、1966）
沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院、1982）

---

[17] 「領収書・発行・完了」「アップデート・インストール・スタート」のように、語と語とが羅列・並置して語の複合体を構成すること。呂（2022）を参照。
[18] 語の表す意味を細分化すること。呂（2018）を参照。

屋名池誠「ライマン氏の連濁論：原論文とその著者について」『百舌鳥国文』11（大阪府立大学日本言語文化学会、1991）

呂建輝「漢語連濁の史的変遷：後部要素が「産」の漢語について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37（岡山大学大学院社会文化科学研究科、2014）

呂建輝「漢語連濁の通時的考察と接尾辞化：「～勢」の場合」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』40（岡山大学大学院社会文化科学研究科、2015）

呂建輝「～本（ホン）」の連濁について：現代語を中心に」『西日本国語国文学』5（西日本国語国文学会、2018）

呂建輝「本（ほん）の連濁における史的変遷」『国語語彙史の研究』40（和泉書院、2021）

呂建輝「漢字音の連濁」『環太平洋大学研究紀要』20（環太平洋大学、2022）

Ohno Kazutoshi「The lexical nature of rendaku in Japanese」『Japanese/Korean Linguistics』9（the Center for the Study of Language and Information, Stanford University、2001）

Otsu Yukio「Some aspects of rendaku in Japanese and related problems」『Theoretical Issues in Japanese Linguistics』2（Massachusetts Institute of Technology and Wako University、1980）

＜辞書・コーパス等＞

JapanKnowledge：日本国語大辞典（第2版）、日本古典文学全集
https://japanknowledge.com/

中納言：日本語歴史コーパス
https://chunagon.ninjal.ac.jp/

日本古典文学大系本文データベース（2023年4月1日より公開停止中）
http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/

室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典（室町時代編）』
（三省堂、1985）

＜用例出典＞

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ：万金産業袋
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/

国文学研究資料館 国書データベース：歌仙料理、しきおんろん
https://kokusho.nijl.ac.jp/?ln=ja

国立公文書館デジタルアーカイブ：当代記、本朝世事談綺
https://www.digital.archives.go.jp/

国立国会図書館デジタルコレクション：東海道名所記、都風俗鑑、けいせい色三味線、諸道聴耳世間猿、古契三娼、夜半の茶漬、子孫鑑、真実伊勢物語、新色五巻書、御前義経記、和訳英辞書、

通言総籬、傾城反魂香、大和本草、辰巳之園、色道大鏡、世界の幕なし、十界和尚話、鸚鵡返文武二道、紅毛雑話、日本大辞書
https://dl.ndl.go.jp/
佐賀大学附属図書館貴重書デジタルアーカイブ：風月花情、春告鳥
https://www.dl.saga-u.ac.jp/
佐藤進一、池内義資、百瀬今朝雄編 中世法制史料集『武家家法（1)』：長宗我部氏掟書
（岩波書店、1965-2001）
新日本古典籍総合データベース：花暦八笑人、丹波与作待夜の小室節、通志選、続々鳩翁道話、航米日録、伽羅先代萩
http://kotenseki.nijl.ac.jp/
新編西鶴全集編集委員会『新編西鶴全集・本文篇』勉誠出版：好色一代女、懐硯、日本永代蔵、諸艶大鑑
（勉誠出版、2000-07）
東京大学史料編纂所編『大日本古記録』：梅津政景日記
（岩波書店、1953-66）
東京大学附属図書館・霞亭文庫：道中粋語録
https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/katei/page/home
東京大学文学部国語研究室所蔵資料画像：明烏後正夢、縁結月下菊、浮世新形恋の花染
https://kokugo.l.u-tokyo.ac.jp/
中田祝夫、小林祥次郎『書言字考節用集研究並びに索引・影印篇』
（風間書房、1973）
日本語史研究資料：諸国方言物類称呼、梅暦余興春色辰巳園、春色梅児与美
https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/
日本古典籍データセット：浮世風呂、秋苑日渉、倭漢三才圖會、地方凡例録
http://codh.rois.ac.jp/pmjt/
明治学院大学図書館デジタルアーカイブ：和英語林集成
https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei
ヨミダス歴史館：読売新聞
https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/
早稲田大学図書館古典籍総合データベース：五ケの津餘情男、五十年忌歌念仏、大通俗一騎夜行、東海道中膝栗毛、犬子集、徒然睟か川、箱まくら、桃青三百韻、笑註烈子、閑情末摘花、客衆肝照子
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/